共通の活動からめあてを追究する複式授業の創造

1　はじめに

異単元内容で授業をしている複式の社会科授業において，①各学年の発達段階と学年間の絡み合いを配慮した授業設計の在り方と，②子どもたちの自立をうながす「見守り」型の支援の在り方が課題である。

2　実践事例　中学年異単元異内容の社会科授業

(1)　共通活動の場づくり

３年生は「1500円以内でフルーツヨーグルトを作ろう。」４年生は「広島県のもので４種類以上使って1500円以内でフルーツヨーグルトを作れるかな。」という類似した課題を設定したことで，子どもたちは，「早く作りたいなあ。」「作れるかな。」「どのくだものを入れようかな。」「どこの店に行けば安くかえるかな」など共通の思いをもつことができた。

(2)　第３学年単元「わたしたちのくらしと商店」に向けての追究

３年生は，果物屋やスーパーに行って，値段を調べたり，チラシを集めて気づいたりした結果を，日直が司会をしながら黒板にまとめていった。子ども達は「外国産のくだものもあるよ。」「なぜ，店によってねだんがちがうのかな。」「チラシが出る日は，すごく安くなるけど，お店はそんをしないの。」「チラシを出さない店もあるよ。」などたくさんの気づきや問いが出された。

子ども達は，調べれば調べるほど新しい発見をしていた。同じくだものでも特や秀などの等級があること。くだものをおいしく見せたり新鮮さを保つためにお店ではいろいろなくふうをしていること，チラシを出すにはたくさんのお金がかかること，スーパーは一度にしなものが買えるからべんりなこと，小さなお店は時々まけてくれること，消費税がないこと，など消費者になりきって課題を追究することができた。

学級活動でフルーツヨーグルトを作った後，子どもたちは，店長になって，お客さんの心をひきつけて，喜んでもらえる大型スーパー（５階建）の設計図を机上で作った。その後自分たちの店の工夫（よさ）や問題点を話し合った。

(3) 第４学年単元　「わたしたちの県」に向けての追究

４年生は，広島県産のものがあるのかを調べた結果を，日直が司会をしながら黒板にまとめた。子どもたちは「広島県産のくだものはほとんどないよ。」「みかんやいちじくはあるけどすごく高いよ。」「11月ごろなら広島県産のいろいろなくだものが出るって店の人が言っていたよ。」「お店の人がなしとぶどうを安くしてくれたから，何とか作れそうだよ。」「広島県産でなかったら，安く買えるのになあ。」「ヨーグルトは広島のチチヤスがあるからだいじょうぶだよ。」「場所によってくだものが決まっているのかな。」「（みかん，りんご，なし，ぶどう）はどんなところでつくられるのかな。」などたくさんの気づきや問いが出された。

子どもたちは，自分のこだわったくだものが，広島県や国内のどこでつくられているのかを調べた。図書室でそのくだものがとれる条件を調べた。みかんとりんごは気温との関係が深く，なしは土壌の水はけとの関係が深いことがわかった。県南部の島嶼部はみかん作りが，県中央部の世羅台地はなし作りが，三次盆地はぶどう作りが，県北部の山地はりんご作りが，それぞれ盛んなわけがわかり，それぞれの自然環境に合ったくだものを育てていることに気づくことができた。また，広島県の学習と並行して，りんごの山地である長野県や青森県を調べている子どもの姿も見受けられた。

同じ県の南部でも島嶼部と違って海岸沿いには，人口が多く，大きな工場が多いことを発見した。交通の便利さを位置と地形から考えることができた。

３　考察

フルーツヨーグルトを作るという共通の活動の場を設定し，各学年のねらいに応じためあて追究をうながす発問をすることができれば，子どもたちはそれぞれの店で調べてきた情報を交換し合いながら，社会的事象からの様々な問いを見つけだしたり，人々の工夫やつながりのすばらしさに気づくことができると感じた。また，活動そのものへの興味が強かったので，子どもたちの素朴な問いを導き出すことができたとともに，日直を中心に各自の調べた情報の関連を集約することができ，新たな課題も導きやすくなった。

しかし，複式学級では，少人数集団の中で暮らすことで起こりやすい引っ込み思案を解消するために，幅広い意見交換ができるように，大勢の中での表現的活動の場をできるだけ多く設定することが必要ではないだろうか。

（松田　芳明）